

2. 放流貝追跡調査

(橋本佳樹)

目 的

中間育成場および資源添加技術開発の試験区に、稚仔貝および親貝を放流し、効果的な増殖手法を確立する目的で、追跡調査を実施した。

方 法

- 1) 1988年6月末から7月中旬にかけて、松原・堅田両試験区のA区、B区およびE区に、セタシジミのD型仔貝(平均殻長約0.2mm)を2,000万個体放流し、中間育成した。A区には、1.5万個/㎡の密度で600万個、B区には4万個/㎡で400万個を放流し、中間育成中である。E区には4千個/㎡の密度で1,000万個を直放した。
- 2) 資源添加技術開発試験として、C区にセタシジミD型仔貝を6月28日に松原、6月29日に堅田に各350万個(3.5万個/㎡)を放流、D区に平均殻長0.8mmの0+稚貝を12月20日に松原で30万個(3千個/㎡)、12月22日に堅田で40万個(4千個/㎡)を放流した。
- 3) 親貝放流区には、11月29日に松原試験区へ780kg、約34万個体(約227個/㎡)、12月1日に堅田試験区へ500kg、約24万個(約300個/㎡)放流した。なお、放流親貝の体型は、殻長最大22.4mm、最小13.0mm、平均16.1mmである。
- 4) 放流貝の追跡調査は、C区では、放流の事前に丸カゴ(φ21cm)を設置して取上げる方法と、B区、C区、およびE区では、φ38.5mmの筒により、表層泥を採集し、稚仔貝を選別する方法を行なった。調査は松原試験区を10月20日に、堅田試験区を10月27日に実施した。親貝放流区、A区、D区は、育成中で、追跡調査は次年度に実施することにする。

結果および考察

堅田のB区では、筒採集の結果、殻長1.1mmのセタシジミが1,724個/㎡、E区で、862個/㎡の密度で採集された。この値の放流からの歩留りは、4.3%~21.6%となる。

図34は、D型仔貝をC区に放流し、10月末にカゴで採集された稚貝の体型組成を示したものである。

堅田のC区では、カゴでの採集調査の結果、殻長0.8mm~4.6mmの稚貝が265個/㎡~512個/㎡の密度で採集された。また、筒採集でも、0.8mm~1.1mmの稚貝が3,540個/㎡の密度で採集された。松原のC区では、カゴ採集で殻長2.1mm~4.6mmの稚貝が256個/㎡の密度で採集された。両試験区に放流した、セタシジミD型仔貝を、当场で湖水注水循環口過方式で飼育したものは、10月15日で殻長のバラツキは少ないが、平均殻長0.49mmと天然にくらべ著しく劣っている。

また、松原における追跡調査では、今回の筒による採集でセタシジミの稚仔貝を得ることは全くできなかった。これは、松原の底質の砂の粒径が荒く、稚仔貝はもっと深い所に生息している可能性が考えられ、現時点で歩留りを明らかにすることはできない。

稚仔貝の育成に関しては、屋内で行なうより、天然漁場を利用した方が良策と思われるが、

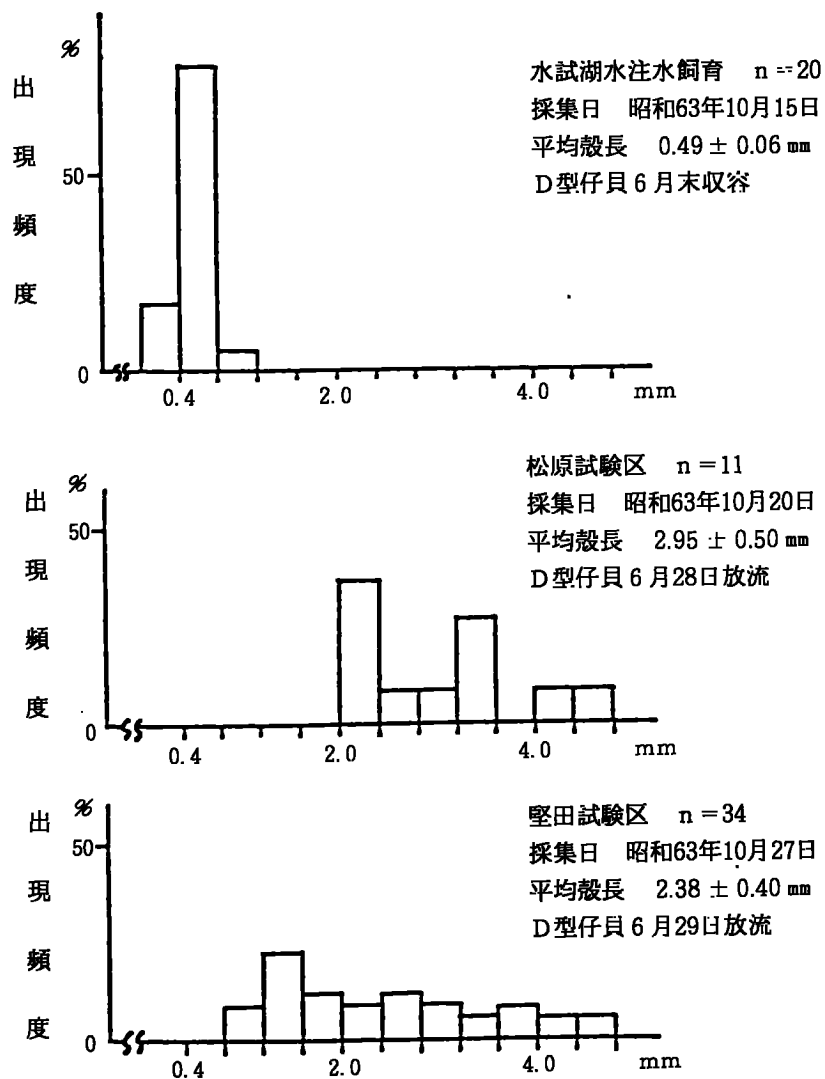


図34 セタシジミ 0+ 稚貝の10月期の体型組成
 (C区カゴ採集調査)

歩留りに関しては、セタシジミの稚仔貝が小型であることと、波浪による拡散も考慮にいれる必要がある。そのため、今後追跡調査の方法、時期、採集方法等を検討していく考えである。